編集後記

令和元年度の年報をお届けします。新しくバトンがつながれたこの記念すべき年度に、本学は大学基準協会の審査を受け、2020年3月12日付で同協会が定める大学評価基準を満たしていると認定されました。本学は規模が小さいながらも事務職員の手厚いサポートを受けながら、各教員がさまざまな学内の委員会、教育、研究、そして地域貢献に真摯に取り組んできていると活動記録から伺えます。そして大学評価（認証評価）結果と今年度の年報を照らして読んでおりますと、各教職員が例年、目の前の仕事に全力で取り組んできたことが積み重なり、認証評価につながったと感じずにはいられません。

令和元年度は新カリキュラムの運用開始、大学と臨床機関との連携強化、グローバル化の推進、大学院の研究コースに新たに学内選抜枠を設けて入試を実施、そして助産師養成課程では初の修了生を輩出することで教育課程が充実するよう目標が掲げられました。その実施体制は、図書館システムのオンラインを主とするデータベース、そして無線LAN化が進められ、学生の学習環境は時代に応じ、変化し続けているといえます。地域貢献では能登町、津幡町、かほく市と事業を協働し地域の方と学生と教職員は「ごちゃまぜ」になりながら、貢献するだけでなく、地域の健康指標である「自然」「文化」「産業」を尊重し「その人らしさ」を学び続けています。国際貢献につながる人材育成としてアメリカ看護研修だけでなく「韓国看護研修」も国際看護演習の単位認定の対象となり「授業科目」としてスタートを切りました。未来につながる人材育成は今、まさに社会が大学教育に求めていることであり、具現化された一つ一つの活動の意味を俯瞰しながら年報を読んでいただきたいと思います。

この年報では詳細に記述する項目がありませんが、石垣学長が会長を務められました第39回日本看護科学学会学術集会は、看護学では全国で最も権威のある学術団体、日本看護科学学会によって開催されました。本学はホスト大学としてまさに教員は身命を賭し、学術集会の成功裏を目指して参りました。こまごまとした忙しさの中でも、少子高齢化、医療の高度複雑化を背景に、これからの時代に必要な看護科学とは何か、異分野融合で視野が広がりつつある看護科学の新しい知見はどうあったらよいか、という討論がありました。教員はこの討論を持ち帰り、新しい教育、研究、地域貢献における発展の原動力にしたことと思います。来年以降の年報も楽しみになってまいりました。改めて日々教職員にはご自愛いただき、共に切磋琢磨し頑張っていきたいと願うばかりです。

本誌の編集にあたり各委員会、各附属施設の皆様から多大なご協力を頂きましたことにお礼を申し上げます。また、実質的な作業を担った平村主任主事、曽山委員、曽根委員の労をねぎらいたいと思います。皆様のご協力に感謝申し上げます。

自己点検評価委員会　年報編集部会長　木森佳子